

「受容と抵抗」西洋科学の生命観と日本

要旨

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(平成22年～平成26年)
国際日本学の方法に基づく「日本意識」の再検討—「日本意識」の過去・現在・未来
研究アプローチ④「「日本意識」の三角測量—未来へ」国際シンポジウム

12:50～13:00 小口 雅史 (法政大学文学部教授)
所長挨拶

13:00～13:45 アラン・ロシェ (フランス パリEHCESS教授)
「江戸思想における生命主義の諸潮流」

日本研究の20世紀後半に流布した臆見に従えば、神道ならびに神道に感化された思想には「生命主義的」傾向があるという。しかし様々に連想される「生命主義的」という語を隠喩として用いる場合、この語の有効性は部分的にはあれ損なわれることになる。議論の領域をどう定め、学問方法論的配慮をどう行えば、この語の使用は正当化されるのだろうか。機械論的パラダイムへの反動と特徴づけられるこの西洋の概念を、日本の知的文化に適用することがそもそも妥当なのだろうか。これらの問に答え、日本の生命主義をそれ独自に構築された概念として捉えるべく、発表では、この概念の生成過程を近世日本思想の中で辿り直す。その際に検討されるのは、この概念の主要な二つの源泉である「むすび論」(本居宣長から佐藤信淵まで)と「気概念の日本的変容」(伊東仁斎から藤昌益まで)である。

13:45～14:30 ポール・デュムシエル (立命館大学大学院先端総合学術研究科教授)
「ロボヴィー」

ロボットは人工的生命の一形態である。とりわけ、まさにロボヴィーのように、日常的な社会的状況でわれわれと相互作用をするよう仕組まれているロボットについては、そう言うことが出来る。ロボットは子どもたちの相手をしたり、お年寄りが買い物をする手助けをしたりする。ここでロボットが人工的生命の一形態であるということは、少なくとも二通りの仕方で理解され得る。まず、これらロボットは生物の一定の特徴を示している限りで、生きていて、あるいはほとんど生きていて人工物である。次に、これらロボットと社会的に相互作用を行うことは、われわれの社会関係を、紛い物という意味で、人工的なものに化す危険性を持つ。こうして行く行くはわれわれの生活が全体として、何らかの理由でわれわれが欲しなかったり作り得なかったりした人間関係の代用物を、機械に求めるようわれわれを導くことにもなりかねないのである。しかるに人工的ということのこの二つの意味は、生きていて自然であるものと、そうではないものとの間に断絶があることを前提にしている。ただまさにこの断絶が、日本文化においては、西洋文化におけるほど明確ではないのである。あるいはそれが明確であったとしても、少なくとも同じ仕方、同じ重要性をもってそうではないのである。高野山には無生物である自動車やロケットやポンプのお墓がある。そのような例も引きながら、日本の社会的ロボットについて、生物と無生物の違いといったことがそれぞれにどう当てはまっているかを考察してみたい。

14:30～15:15 ドミニック・レステル (フランス パリENS准教授/ 東京大学招聘研究員)
「わが友ロボット」

ロボットと友達であるといったことは若干奇妙なことである。他の人間と、あるいはひょっとして他の動物とわれわれは友達でありうるが、われわれは人工物と友達になりうるのだろうか。しかるに日本では、ますます多くのロボットが友達と見なされるに至っている。これは日本文化に特有なことなのだろうか、あるいは、友情概念が前代未聞の仕方で拡大される予兆なのであるか。結局、われわれは友とは何かをおそらく決して理解したことがなかったのである。

15:25～16:10 木島 泰三 (法政大学文学部兼任講師)
「natural selection」の日本語訳と社会ダーウィニズムの残留」

ダーウィンの進化学上の用語「natural selection」は(主に)「自然淘汰」および「自然選択」という二つの別の用語に訳されてきた。いずれの訳語にも長所と短所があるが、本発表で指摘したいのは、「自然淘汰」には「自然選択」にはないある特徴があり、そしてその特徴は、ずっと以前に姿を消してしまったと思われがちな社会ダーウィニズム的思想が、現代日本に未だ残っている、ということを示唆するものである。

16:10～16:55 金森 修 (東京大学大学院教育学研究科教授)
「現代日本の生政治学」

今回のこの報告では、我が国の文化が人々の健康や命よりも短期的な経済的利潤を中心に構築されているという懸念すべき傾向について、二つの事例をあげて論じる。一つは一九五〇年代から六〇年代にかけて大きな社会問題になった薬害SMON、もう一つは3.11以降に発生した福島第一原発の事故後、我が国の政府、科学者集団等が示した情報操作や放射線障害の過小評価のありかたである。

16:55～17:40 村上 靖彦 (大阪大学大学院人間科学研究科准教授)
「精神科病院における移行空間—或る日本の精神科病院を事例として」

日本の精神科病院は戦前からの暴力と拘束の歴史をもっている。近年、多くの精神科看護師たちがこの歴史と闘い、患者たちの人権を守る実践スタイルを模索してきた。医療制度が持つ強制的側面と、看護がもたらす人間関係との緊張は、精神科病院の空間構造を重層的に分節する。いかにして遊びと享楽を可能にする空間を作り出すのか、いかにして外へ向けて開くのか、このような空間をめぐる問いは、精神科病院にとどまらない射程を現代社会のなかで持つであろう。

17:50～18:35 米山 優 (名古屋大学情報科学研究科 教授)
「西田における生命と技術」

西田幾多郎の生命観や技術観について述べます。科学による物質や生命の扱いと、そうした科学的な手続きを遂行する主体の形成を、「歴史的地盤」にまで遡って議論します。社会的・歴史的側面を離れて真理そのものがあると考えた錯誤を見据え、技術の話を「行為的直観」という西田の考え方にきちんと位置づける必要を訴えます。

18:35～19:20 檜垣 立哉 (大阪大学大学院人間科学研究科教授)
「三木清の技術論」

三木清の技術論は、「構想力」に関する三木独自の視線をいながら、西田的な行為的直感を補完するような「形」の論理としての意味をもっていた。そこで、ベルクソン、カント、ハイデガーにかかわる構想力の論理をもちいながら、トランスフォルマシオン=形の変容論につなげていく三木独自の論理を、技術論につなげる方向から検討したい。

19:20～20:05 チェリー・オケ (フランス リヨン第3大学教授)
「黒川紀章の共生の哲学」

日本人建築家である黒川紀章(1934-2007)は「機械の時代」から「生命の時代」への移行を目指す共生(symbiose)の哲学を提唱した。この提唱で私が興味を引かれるのは、全面的に西洋哲学のものともみなされる二元論を打つために彼が仏教的伝統を、これこそが日本の本質であるとして持ち出す、その持ち出し方なのである。しかるに言うまでもないが、スピノザやヒュームの例を挙げるまでもなく、西洋哲学は長きにわたって二元論問題を論じてきており、二項を正面衝突させる二元論の単純なやり方に数々の批判をぶつけてきたのである。であるから、二元論批判において、なぜ「日本的」といったことが殊更に言われるのか問われるのである。

黒川は1959年に「メタボリズム」運動を創設した。ここで彼は自らの活動を語るのに、メタボリズム(新陳代謝)とかメタモルフォーゼ(変態)といった生命論の言葉を用いた。生命へ回帰するというのは彼にとっては意味の創造への回帰となる。個体の生命にしろ種の多様性にしろ、それらは芸術や文化の多様性につながるものなのである。反対に普遍性こそが、機械の時代の理想であった。建築(黒川の領分)では、機械の時代とはル・コルビュジエの機能主義の時代であろう。メタボリズム運動の担い手たちはまさに「機能」を背景に追いやって「意味」をこそ前面に押し出そうとした。さて、こうして生命の時代はもはや普遍性を求めず、異なった諸文化の共生のみを求め、といったことになるのか?

20:05～20:30 討論

